

下村孝太郎―新島から理科教育を託された男

講演	森 一郎〔もり・いちろう〕
講師紹介	元同志社女子中学校・高等学校校長

こんにちは。ただ今紹介いただいた森です。現在の理工学部の前身の工学部工業化学科、今の機能分子学科の出身で、京田辺校地ではなく今出川校地で勉強しました。

はじめに

同志社は１８７５（明治８）年11月29日に８名の生徒と２名の教師すなわち、新島襄とJ. D. Davisで同志社英学校として出発しました。翌明治９年９月以降には、学生がキリスト教の信仰を持つようになったために廃校になった熊本洋学校の学生20数名が、その学校の教師であったL. L. Janesの紹介で同志社英学校に入学してきました。彼等はすでに同志社英学校と同等の課程は終えていたので、急遽余科（神学科）を新設して受け皿とし、いわゆる熊本バンドと呼ばれるグループが開校間もない同志社英学校に加わったわけです。彼らが同志社に入学したことは重要な事柄でありました。新島の伝記を書いた和田洋一は「熊本洋学校の生徒の流入は、同志社にとって確かに貴い輸血であった。創立以来、外圧になやまされつづけ、意気あがらなかった同志社は、にわかに活気づき、学校の水準は目に見えてたかまったのである。」（和田洋一 『新島襄』 岩波書店 ２０１５年 １８５頁）と書いています。熊本バンドの学生は新島が好んだいわゆる「傀儡不羈」（常軌では律しがたいほど独立心と才能あふれる）の学生でした。

同志社英学校の第１回卒業式は、１８７９（明治12）年６月に行われ、余科（神学科）の15名が卒業しました。全員が熊本バンドでした。今日取り上げる下村孝太郎もその一人です。配布されている「Doshisha Spirit Week 2019 SPRING」のチラシの写真はその時のものですが、残念ながら下村孝太郎はこの中には写っていません。父親の葬儀で熊本に帰っていたと聞いています。

さて、新島は大きな著書を書いてはいませんが、大変量の書簡が残っていて、「書簡の人」と言われています。新島がこの下村宛に書いた書簡は、和文が7通、英文が5通、併せて現在12通確認されています。これらの書簡はすべて『新島襄全集』の3巻・4巻・6巻で読むことが出来ます。一方、下村が新島宛に書いた書簡は18通確認されていて、そのうち和文書簡の2通は『新島襄全集』の9巻〔来簡編〕で読むことが出来ますが、残りの書簡16通は英文で全集の中には含まれていません。新島宛にきた英文の書簡は、目につきにくいものになっていました。しかし、未定稿ではありますが、人文科学研究所から『新島襄宛英文書簡集（未定稿）』が２００７年に出され読めるようになりました。新島・下村の往復書簡で同志社の大学設立問題や教育の在り方など師弟間の忌憚のない意見の交換などが見られ、下村孝太郎がどんな人物であったか解ってきました。そこで新島・下村のやり取りのあった書簡文を見ながら、下村について紹介していきたいと思います。なお、和文の書簡はそのままで候文ですが、英文は私のまずい訳ですが現代文で示しました。

下村の米国留学

下村が米国に留学に至った経緯はどうであったでしょうか。タイトルの副題に「新島から理科教育を託された男」としたことを示す非常によく知られた新島の下村宛の書簡です。

（新島発 １８８８．８．11、明治21）「小生ハ我力校ニ於テサイヨンスノ振ハサルヲ痛嘆シ候間、貴兄ニシテ充分御用意アリ其ノ方ヲ負担シ賜ハ、必ラス我力校ノ面目ヲ一変スルニ至ラン、願クハ今ノ本校ヲシテ充分コレシノ位置ニ進メ度、政府ノ高等中学ニモ一歩ヲ譲サル様ニ致シ度候」（新島襄全集編集委員会編 『新島襄全集』3 同朋舎出版 １９８７年 62頁。以下、③621頁）。

政府の高等中学校は、１８８９（明治22）年に京都に移ってきた第三高等学校を意識しています。同志社で不十分な理科教育について新島が下村に期待したものです。

しかし、新島はこの考えをこれより以前から持っていました。下村から新島宛の英文書簡には、

（下村発 １８８４．９．25、明治17）「あなたは若い時から私の恩人で、アメリカに行く時Scientific Schoolに私の場所を捜すと約束した。その時から、私が西洋に行く考えは5年間心を占めていた。あなたがアメリカにいることを聞いて、その道が開けることを願っている」（『新島襄宛英文書簡集（未定稿）』 同志社大学人文科学研究所 ２００７年３月 書簡番号135。以下、【135】）。

この書簡の発信は１８８４年で、その５年前の１８７９年は丁度、下村が同志社英学校余科を卒業した年にあたります。新島は下村の為に米国でScientific Schoolの適当な場所を探しており、新島は第一回の卒業生を出す頃に既に大学で理科教育を充実させる意思のあったことがうかがわれます。

レジュメの最後にある下村の略歴を参考にしてみましょうと解りますが、卒業後しばらくは岸和田藩主岡部氏設立の学校「時習舎」で英語を教授していたが、廃校になったので熊本に戻り私立の英学校を設立し英語を教えます。この間熊本でのキリスト教の伝道にも従事していたことが新島の書簡で解ります（③210頁）。熊本では母親と7人の妹の面倒を見なければならなかったのですが、１８８１（明治14）年には同志社英学校に戻り物理・化学及び数学を教えています。下村はこれらの科目は同志社英学校ではなく、熊本洋学校でJanesから習っています。

下村の書簡にあるように、１８８４（明治17）年４月～１８８５年12月12日に新島が2回目の欧米旅行に出かけたことから、下村には米国留学がにわかに現実味を帯びてきた事が解ります。そのような下村の思いに対して、宣教師Greeneが留学先の紹介や、友人の湯浅吉郎から資金の用立ても出来、留学する準備が整ったことを新島に伝えています（湯浅は同志社の徽章を考案した人物）。

（下村発 １８８５．２．14、明治18）「Dr. Greeneがやってきて私の留学に関心を持っており、道が開ける為に彼が出来ることは何でもすると約束してくれた。・・・Dr. Greeneの特別な友人であるDr. Fuller（マサチューセッツ州のWorcester Country Free Institute of Industrial Scienceの校長）に手紙を書いてくれた」【153】。

（下村発 １８８５．７．13、明治18）「兼て聞申候ニハウーストルノ専門校〔Worcester工芸学院〕ニハゼルマンヲ大事トスト思候事ニ御坐候、・・・然ハ願クハウーストルノ専門校へ入校シ度候、尤モ初学ヨリ始め度心組ニ御坐候、・・・先生ニハ何時頃御帰朝ニ相成申スヤ、米国ニテ拝顔可仕存候力、此事出来可申ヤ、願クハ此事ヲ果シ度候」（⑨上185頁）「然ル上ハ正數米国留学ノ都合出来タル者ト心得申候、旅費ノ所ハ既ニ湯浅君力其母ヨリ内々受ラレタル金子三四百円有ル中ヨリ私ニ二百円丈無利足ニテ貸シ申ス様ニ相成候間之ヲ借用致可申候、二百円有レバ今日ノ旅費ハ足り可申ト存候、其上デビス、グリーンノ両師ハ早キヨリ愈々打立ノ日ニ相成申サハ幾分力寄附セント兼テ申サレタル事モ御坐候へば、衣服等凡テ打立ノ仕度ハ之ニ足レリト存候」（⑨上184頁）。

この書簡を読んでいると下村の留学は、同志社英学校からの補助や支度金はなく、旅費は友人の湯浅からの借入と、宣教師GreeneやDavisからの協力を得ての私費留学であります。一方、新島は同志社の将来の為、下村が理科の研鑽を積むことを願っており、下村は留守宅の家族の面倒を見なければならないことに対し、具体的に月5円の支援を与えています。また下村が家族の為に預けておいた預金の利息が下って生活費の不足が生じたとき、相談された新島は、月1ドルを余分に援助しています。新島は下村が安心して留学できる環境を作るようにしています。下村はこれらのことに対して新島に非常なる感謝の気持ちを表し、終生恩義を感じています。

新島との書簡のやり取り

一留学中の活動一

米国滞在中の下村は、新島に留学中の報告や新島からの依頼に応じたり、募金活動あるいはこれからの同志社の在り方など書簡の交換をしています。

留学先は宣教師Greeneの紹介で、Worcester工科大学に学ぶこととなりますが、学長Fullerからは特別に便宜を図ってもらっており、下村が密度の濃い充実した学が環境にあったことが理解できます。

（下村発 １８８６．５．１、明治19）「Dr. Fullerは親切で専門学校で私が卒業するように考えている。この学校での卒業は高く評価されていて、一般に仕事で高い地位が得られる。・・・Dr. Fullerは私が必要とするものは何でも私の為に準備すると言っている。学校での学業は、他の為の時間は残されていない。他の技術学校で通常4年かかるものを3年で完了するように進めている。・・・Dr. Fullerは私を主要なUniversityやCollegeに教授法を見る為に連れて行ってくれるだろう」【249】。

下村はここWorcester工科大学で3年間学び、BS（理学士）の学位を得ています。下村の学が意欲は強く、更にJohns Hopkins Universityに進みますが、ここでは著名な有機化学者Remsenの下で1年間、当時最先端の有機化学を学びます。下村は留学の延長について望みはするものの、留守宅の母親や妹たちの面倒を見なければならないので、難しいことでした。しかし、新島が援助し母親の了解を得るなど留学延長に尽力しています。

丁度この時期、新島は大学設立運動で資金を得る為に各地を訪れていましたが、病気がちの日を送っておりました。自らアメリカでの募金活動をも考えていましたが、募金活動で体を酷使し、体力低下から同志社病院の医師Berryからも反対されて、アメリカでの役割を留学中の下村に託しています。

（新島発 １８８８．８．11、明治21）「願クハ今ノ本校ヲシテ充分コレシノ位置ニ進メ度、政府ノ高等中学ニモ一歩ヲ譲サル様ニ致シ度候、其レニ付ケテハ必ラス多分ノ資本ナカルベカラス、資本ヲ募ラントナレハ米国ニ如クモノナシ、兼テ貴兄ノ御企ノ如クアメリカンボーールドトハ全クインディペンデントリーニ又プライヴェートリーニ或ル金穴家ニツキ日本ノ現況ヲ陳ヘ、大学ノ日本ニ甚必要ナル事ヲ説、其ノ感情ヲ惹キ起シ賜ハ、事或ハ成就セバシ、貴兄願クハ此ノ大任ヲ御負担アリ賜ヘ」（③621頁）。

世話になっている新島からの希望であり、下村はその気持ちは充分にあってもう学校の勉学業務はいそがしく、なかなか時間が取れない中から、夏休みなどの休暇を利用して富裕な人を訪問します。しかし避暑などで不在でなかなか会えないとか、同志社のキリスト教は会衆派という宗派ですが、宗派の違いで協力を得られないなど苦勞をしています。有名な資産家J. Rockefellerにも会っていますが、彼は会衆派ではなくバプテスト派で協力を断られています。

（下村発 １８８８．12．31、明治21）「あなたが言うようにどの宗派にも属しない地盤から資金を得ることが最良です。同志社を宗派経営の大学Collegeに変えることは良くない。過日私

はJ. Rockefeller氏に会いましたが、何がしかのことをするのを断りました。・・・彼は強力なバプテスト派であります」【344】。

（下村 1889. 3. 19、明治22）「Rockefellerはおおよそ300万ドルをバプテスト大学設立の為にしました。彼は良いことをしたと言わざるを得ない。現在私が思うに彼は此の国の最高の富裕者です。しかし彼に日本の為にお願いしたとき、自分は合衆国の仕事に圧倒されており、更に外国の国の為にすることは出来ない」【379】。

とあります。勿論、書簡には大学設立の募金活動だけでなく、同志社の教育の在り方などについても下村は新島と書簡を通して話し合っています。

（新島 1886. 6. 29、明治19）「貴兄之信仰上之リツチ・エクスピリヨンス云々二付、小二於而深く神ニ奉謝候、貴兄ニモ御存之通同志社之精神ハ此真理ニ基キ候間、貴兄之此実験あるハ他日小生輩之同志社隆興ニ向ヒ大ニ望を起す所ニ候得は、學術と宗教ハ飽までも併行して他日之御用意あらん事を切望仕候」（341頁）。

新島は、同志社がキリスト教を基本として学問とキリスト教の考え方が併行して進むことを願っています。下村がそのための体験を積んでいることを神に感謝しています。下村のキリスト教に対しての理解はなかなか深く、同志社ハリス理化学校では化学の教師をしていましたが、神学部で聖書講義もしています。同志社に於いて神学が大切であることを、下村は、

（下村 1888. 11. 25、明治21）「神学コースの評判を引き上げる為の何か考えがありますか。なまぐらな学生が神学に携わるようだが、修養の不足を断ち切るため必要単位にヘブライ語とギリシャ語の導入は基準を引き上げます。・・・学校がクリスチャンの学校なら神学部が最も重要なもののひとつです。・・・湯浅（吉郎）氏はヘブライ語の勉強に打ち込んでおり、それを教えるのに適切な人物で、彼は同志社に戻りたいと考えている」【329】。

新島は、構想している同志社大学のあるべき方針を下村に述べています。

（新島 1888. 11. 30、明治21）「我々は包容力大きく、異なるセクトの学生も同じように受け入れることである。我々の望みと願いはキリスト教大学Universityにすることで包容力は大きく、宗派心の強い人も合同させる。すべての異なった宗派から学生を受け入れ、彼等を等しい立場で待遇する」（344頁）。

下村が考えている理科教育の進め方については、

（下村 1888. 12. 31、明治21）「世界の指導的な大学Universityのすべてで科学的トレーニングは広く行われている要素で、日本での教化を進歩させることの最も効果ある方法である。UniversityとCollegeの仕事可能な限り合わせることが教育的にも経済的にも良いことである。Johns Hopkins (University) が求めている方法である。・・・米国の化学で最も名高いRemsen教授はじめ3人の化学の先生がいてこの人たちが教えている。・・・初心者教えるのに程度の低い教師を使って多方面に委託することは大きな誤りである。人が科学を学び始める時は最も重要な時であり、彼の進む将来の道筋は、その科学を最初に教えた人の影響によって形成される。CollegeとUniversityが協力的にあることの利点で、人を機械に変えるのを防ぐ唯一の方法である。・・・東京帝国大学の卒業生は人というより一層機械的であって、人物と呼ばれるような人はあのような場所からは決して出てこない。・・・言いたいことを言いましたが、「同志社大学」は先行の「同志社英学校」に重きを置くのではなく、根から幹が生ずるように脱皮するものでなければならない。あなたの個人的な影響を負っている同志社の特質を受け継ぐことがそのように育つことである」【344】。

当時日本での大学は官立の東京大学だけで、官立の大学の問題点を指摘しています。

ハリス理化学校の設立

ハリス理化学校のJ. N. Harrisとは製薬業、鉄鋼業、鉄道事業、銀行頭取など事業に成功し大きな資産を作り上げたアメリカンドリームの人で、会衆派の熱心なキリスト教信者で、アメリカン・ボードの理事もしていました。

大学設立の為の募金活動をしていた新島は宣教師Learnedの母親の紹介でHarrisを知ることになります。丁度この時期、休暇で米国に帰っていた宣教師Greenelは、Harrisと逢って同志社への募金の話をしたようです。その時にGreenelはHarrisから同志社に欠けるものは何かと問われた折、理科教育と答えています。このことから、Harrisは同志社に1万ドルの寄附を決断しています。この朗報を新島から受けた下村は、Learnedから送られてきた紹介状を持ってコネティカット州ニューロンドンの邸宅にHarrisを訪問しています。その際の思い出を下村は「同氏の特志寄附に對し、特に御禮を述べ度、且つ御指導を受ける必要もあつて、自分は懇々往訪した。同氏は初対面とも思へぬ親しみを以て、未知の外人たる自分を歓迎して下さい。食後に廣やかな庭内を散歩すると、奥まった後庭に案内せられた。豈に圖らん、そこに五つの墓碑が建てられていたのを見出し、自分は怪んで同氏を見上げた。同氏が頷き乍ら『この墓碑は孰れも我が愛兒の爲に建てたものだ。彼等は不幸にして先立ち逝いた。彼等の教育費にと用意したものを、その儘、同志に寄附し、日本學生の科學教育に供する次第だ。君等は我が微志にそうて盡力して貰いたい』と語れる同氏の眼には滴に光るものが見えた」（牧野虎次「ハリス氏特志の動機」『同志社工学会誌』第1巻 2号 同志社工学会 1951年 10頁）。と話した記録が残っています。

Harrisは8人の子どもを得ていますが、全て30歳までに亡くしています。（6番目の娘Woodruffは新島がフィリップスアカデミーに通っている時に隣のアボットアカデミーに学んでいて、若き新島のことを父のHarrisに伝えています。Harrisは新島がアメリカに入ったごく初期から新島の存在を知っていたようです）。

この後、同志社のハリス理化学校設立の準備委員会を設け、Greene、Fuller、下村にHarrisを加えて設立の為の打ち合わせが行われました。最終的にHarrisは寄附の額を10万ドルまで増額しました。新島はこのビッグニュースを1889（明治22）年4月27日付のGreeneからの書簡で知ることになります（5月29日に新島の手元に書簡が届き知ります【388】）。

下村は、Harrisを含めた話し合いの中で、ハリス理化学校設立への対応や考え方、また下村という人間をHarrisに知られることとなり、結果、下村はHarrisから絶大な信頼を得たようであります。

10万ドルの内訳は、校舎等建設と学校運営に2・5万ドル、基金として日本の公債に5万ドル、米国で投資に2・5万ドルが当てられました。米国で投資された果実は、理科学校の図書費などに充てられることになっていました。なお、この果実は今もなお毎年同志社に送られてきています。

（下村 1889. 5. 20、明治22）「Mr. HarrisがScience Hall建設の1万ドルの他装置の為の8千ドルを与えてくれるニュースはすでに伝わっているでしょう。彼はすでに総額10万ドルを下村社に与えました。そして更に与える可能性があることを知っています。私が次の年留まることはMr. Harrisの同志社に対する関心を減少させる。・・・私の人格がMr. Harrisの素晴らしい贈物と関係があることはちっとも知らなかった。あなたの最近の手紙で計画を実行すれば我々はMr. Harrisを失うという危険にさらされる」【396】。

文中「次の年留まる」というのは、新島からの希望でアメリカで募金活動を続けてほしいということで、ハリス理化学校の開校に支障をきたすことになるという意味です。下村はHarrisの寄附の思いに添えてハリス理化学校を開校させ、成功させることが大切と考えたのです。

余談ですが、ハリス理化学校の卒業生の加藤与五郎（フェライトの発明者）がDavisから聞いた話で、「Harrisは同志社のハリス理化学校のために100万ドルの寄附が遺書に書かれていたが、もめごとがあつて取り消された」（加藤与五郎「ハリス理化学校の思い出」『同志社工学会誌』第1巻 2号 同志社工学会 1951年 9頁）という話も残っています。

下村は1889（明治22）年9月に日本に帰ってきて、ハリス理化学校設立に奔走します。1890（明治23）年1月9日に下村は熊本バンド出身の教員、金森通倫と大磯の百足屋へ新島を見舞い、一泊しています。「二人の教員と新設の理化学校の計画を論じてその晩を過ごしたが、新島はふだんと変わらぬように見えた」（356頁）。しかし、新島はハリス理化学校の開校を見ることなく、1890（明治23）年1月23日に大磯で亡くなつてしまいました。後を託された下村は、1890（明治23）年7月に「同志社ハリス理化学校設立趣旨」（上野直藏『同志社百年史』資料編一 1979年 444～445頁）を発表しています。そして同年9月から実際授業を開始しています。

その「設立の趣旨」の内容は、下村が米国留学で学んだことを基に、理科教育があまり重視されていない時期に、時代を先取りした教育の方法や、同志社ならではの教育方針がその中に示されています。下村は米国に留学する前からドイツに関心があつたようで、ドイツの隆盛に習って大学を考えていることが最初に示されています。

「近世独乙ノ強大ナルハ其ノ大学ノ盛ナルニ由ル而シテ数十ノ大学ニ於テ最も盛ニ奨励スルモノハ物質上ノ學術即チ世ニ所謂理學是レナリ物理ト云ヒ生理ト云ヒ化学ト云ヒ都テ万国ニ超越シタルハ世人ノヨク知ル所ニシテ此三種ノ學術ヲ応用シテ国利ヲ起シタルコト少ナカラズ」

海外留学を通して広く世界を見、日本の国の状態を正しく判断していると思います。

「我が日本ハ小国ナリ而シテ其人民多キニ過グ国土既ニ限リアリ農業ヲ以テ立ツ可キニアラズ工業ヲ盛ニシテ行末以テ工業國民トナル可キノ必要アリ然ラハ工業ノ基本タル理學ヲ盛ニシテ日本ノ子弟ニ理學上ノ教育ヲ授クルハ最も欠ク可カラザル所ナリ・・・理學ノ教育ニ依テ得ル者第一觀察力、第二運手力、第三推理力、此三者ヲ養フモノ即チ理學ノ教育上ニ特有スル所タリ」

同志社であるからこそできる理科教育の内容について、単に知識・技術を身につけるだけではないと述べています。

「我国ハ早晩工業ヲ盛ニセザレハ其隆盛期ス可カラズ是ヲ思ハハ技師ヲ続々世ニ出スコト甚タ必要ナリ而シテ此ノ技師タルヤ技術ヲ要スル固ヨリ明力ナリト雖トモ其道德亦欠ク可ラズ・・・技師タル者必ラズシモ一匹ノ動物ノミト云フ可カラズ必ラズシモ一個ノ器械ト見做スベキニアラズ智力アリテ事物ヲ新ニ研察シ手能アリテ技術ヲ謬ラズ道德アリテ不正ヲ致サケル信用アル技師コシ是レ現今日本國ノ必要ナレ同志社力智徳並行ノ教育主義ヲ以テ世ニ立ツハ普ク人ノ知ル所ナリ同志社ノ目的當ニ普通教育ニ止マラズ弘ク専門ノ學ヲ授ケントスル亦タ人ノ知ル所ナリ」

技術者のあるべき姿は今の時代にも充分通じる内容であります。道德という言葉で示されていますが、良心を持って行い、機械の歯車のようになってはいけないことを述べています。

開校式は1891（明治24）年の4月に行われました。当時この学校のレベルの教育をしていたのは東京（帝国）大学だけで、京都帝国大学が1897（明治30）年から、私学の方では慶応大学が1939（昭和14）年、早稲田大学が1909（明治42）年からです。ハリス理化学校が日本に於いて、如何に早くから取り組まれた高等理科教育であるかが解かると思います。

工業界への転出—ハリス理化学校を辞任—

ハリス理化学校は、1891（明治24）年4月に開校式を終え、純正部門で化学兼生理学の専門科と応用部門で陶磁器の専門科でスタートし、1893（明治26）年には応用部門に業学を加え、また一般からの化学分析などに応じた検査部も設けました。

しかし順調にいくな見えたが、1894（明治27）年の日清戦争以後国家主義が台頭し、国内で外国人やキリスト教に対する敵意が高まってきました。その結果、学生に対する徴兵制度の猶予、免除の問題や、1890（明治23）年に発布された教育勅語が同志社に大きく押し掛け、存続すら危がまれる社会状況になってきました。同志社を日本の教育制度に適應させる方針を追求して、ハリス理化学校の為の基金5万ドルの扱いについて下村は同志社当局と意見が折り合わず、1895（明治28）年に辞表を提出して同志社を去りました。ちなみに下村が辞職した後、開校以来22名の優秀な卒業生を出したハリス理化学校は、1897（明治30）年に7年という短命で廃校となりました。

下村は辞職し教育界を去って化学工業界へと第二の人生が始まりますが、その姿勢は、

「余は化学教育の事業を以て終身の事業と心得、此校の発達に尽瘁せしが、五年経過するに至り寄附行為の実施上同志社理事と意見合はず遂に職を辞せり。茲に於て本来の志望に大頓挫を來たし大に考慮すべき境遇に陥り、余の如き内地に於ての学歴貧弱なる者には到底満足なる位置を得らるゝの見込なしと考へ、化学工業会に身を投じ新事業を創立せんと企てたり。時恰も日清戦争終結後にして我実業界の状態は新事業を促したれば、此の機遇すべからずと思へり。只自分の従事する事業は左の条件に適合すべき性質を有するを必要とせり。

- 第一 自分の従事する工業は有機化学に関係すること。
 - 第二 人真似をせず我国最初の事業たること。
 - 第三 成るべく人の事業の範囲に立ち入らざること。
 - 第四 理論と実地とは符合すべきものと確信したれば、工場経験なしと雖も此際決心して自ら責任を負ひ工場を建設すること」（同志社社史資料室 『追悼集』VI 1993年 148～149頁）。
- この文章の冒頭には、下村が教育を生涯の職と考えていた無念の思いがにじみ出ています。

その後の下村の活躍は略年譜を見ていただければ解りますが、化学技術者として化学工業の世界に輝かしい業績を残しています。時間の関係で簡単に述べますが、石炭の化学工業に関した内容で石炭の乾留でコークスの研究開発に従事します。大阪舎密工業株式会社を設立（1897年）し、製鉄には欠かせない骸炭と呼んでいたコークスの製造を手掛けます。石炭の乾留でコークスを得るわけですが、同時に副産物としてコールタールや石炭ガスが出ます。これら副産物の有効利用を考え、コールタールの成分を検討し、東洋木材防腐株式会社（1907年）や日本染料製造株式会社（1930年）に技術面で関係し、石炭ガスの利用から大阪瓦斯株式会社との合併（1925年）など、石炭化学工業に大きく貢献して、現在につながる科学技術の成果を残しています。またこれら工業界で活躍している多忙の中、同志社の為に理事や社長（第6代）にも就任し、新島の同志社の為に尽力を尽しています。下村孝太郎という人物は、同志社の初期に出た類まれなる人材の一人であったと言って間違いありません。

下村孝太郎略歴

『追悼集VI—同志社人物誌 昭和10年～昭和12年』（「同志社新報」第19号（昭和12年11月））から作成

1861（文久元）年		9月26日	熊本市（熊本城外本山村）で父下村九十郎、母房子の下に生れる
1869（明治2）年	8歳		地元の漢学塾に入門
1872（明治5）年	12歳		熊本洋学校に入学
ジェーンズから究理学、舎密学、キリスト教を学ぶ			
1875（明治8）年	15歳		熊本洋学校卒業
1876（明治9）年	16歳		同志社英学校に入学、キリスト教を学ぶ
1879（明治12）年	19歳		同志社英学校余科卒業、同志社最初の卒業生の一人
時習舎（岸和田藩主岡部氏設立）にて英語教授			
？			熊本にて私立英学校創立
1881（明治14）年	21歳		同志社英学校 物理・化学及び数学の教員（4年間）
1885（明治18）年	25歳		米国Worcester Polytechnic Institute入学
化学専修 1888年6月28日 BSの学位を得る			
Johns Hopkins University大学院に入院			
Remsen教授の下、有機化合物研究			
1889（明治22）年	29歳	9月	日本に帰国
1890（明治23）年	30歳	1月9日	大磯の新島襄を金森通倫と訪問
1月23日			新島襄逝去
同志社波理須理化学学校設立に従事			
1891（明治24）年	31歳		北垣国道長女とくと結婚
1895（明治28）年	35歳		ハリス理化学学校の教授を辞す
1896（明治29）年	36歳		J. N. Harris逝去
1897（明治30）年	37歳		大阪舎密工業株式会社設立発起、技師長兼工場長
1899（明治32）年	39歳		同志社理事就任
1903（明治36）年	43歳		臨時同志社社長兼校長
1904（明治37）年	44歳		同志社社長（明治40年まで就任）
1905（明治38）年	45歳		大阪舎密工業株式会社取締役顧問
1907（明治40）年	47歳		東洋木材防腐株式会社顧問
1915（大正4）年	55歳		工業博士学位得る（2月）
1918（大正7）年	58歳		大阪瓦斯株式会社顧問
1923（大正12）年	62歳		大阪舎密工業株式会社社長
1925（大正14）年	64歳		大阪瓦斯株式会社と大阪舎密工業株式会社合併し専務取締役
1926（大正15）年	65歳		香焼コークス株式会社創立社長、間もなく取締役
1930（昭和5）年	69歳		日本染料製造株式会社技師長
1933（昭和8）年	72歳		Worcester Polytechnic Instituteから工学博士（名誉学位）
1937（昭和12）年	77歳	10月21日	逝去